

特別寄稿

ナンガ・パルバット
周辺トレッキング

2009年5月31日

～6月18日

海老原道夫

ナンガパルバット周辺トレッキング

私は、今までパキスタンへの山登りに 3 回行っているが、そのたびに小さなピークに登る事に夢中になり、せっかく 8000m 峰の近くを通りながらその姿をしっかりと眺めていなかった事に今更ながら気が付いた。

一度それに気が付くとこの忘れ物の存在が思いっきり大きく心の中をしめ、おまけに 2003 年にフンザのミルシカルを登って以来もう 6 年も経っているのに大いに欲求不満になっていた。実は前年、仕事の方の利益もそこそこ出て、チャンスだと思っていたのに、それを言い出す前に妻と娘とが思いっきり良く良く豪華な海外旅行に出かけてしまっすっきり氣勢をそがれてしまった。

そんな訳で今年の仕事はもちろん大赤字で全然ヒマラヤに向かうタイミングでは無いのだが、体力は年々落ちて来るし、いつ不治の病を宣告されるか知れない身であってみれば、もう周りが何と云おうと構わずに 5 月 31 日の PA 機に乗り込んだのでありました。

今回も出発までの現地との煩雑なやりとりは、全部長谷川アルパイン事務所の長谷川昌美さんにオンブにダッコでお世話になり、とにかくいつもの通り一人で中学生程度の英語力と、ほとんどゆとりの無い金とパスポートを左右のポケットに入れての出発だった。

6 月 1 日

3 時間ほどの遅れだから PA 機としては大順調でイスラマバードに到着し、成田から相前後していた宮森さん達の福島県のパーティほぼ同行するような形で空港の建物から出ると珍しくナジールが出迎えに来ており、ここで宮森さんを紹介される事となった。

彼等はカラコルムのルパルガルの登頂を目指すとの事で 20 日ほど後のギルギットからの帰路また相前後して帰国する事になったのでした。彼等は首尾よく登頂を果たし日本人としては初登頂との事だった。

それはともかく、到着が 3 時間遅れると云う事は今夜のホテルでの睡眠時間は 1 時間と云う事になり、ベットで服をぬぐ気にもならない一夜を過ごしたのだった。

6 月 2 日

とにかくかたちだけの翌朝、再び空港に戻ると、今回は運良くギルギット行きの便が飛ぶそうで、当たり前の事が、すごくついているように喜びながら乗機した。

たった 1 時間のフライトなのだが、今回は結構なストーリーがあった。

まずは私のシートを見つけると、アレレ、かなり太めのパキスタンおばさんが凄く嬉しそうに座り込み何やら荷物を広げていて、私はスチュワーデスと空いている席を見つけてウロツク事となりまるでローカル列車みたいな事になってしまった。結果、多分この便でのビジネスクラス席らしい、前の方のエリートっぽいパキスタン人の男女 3 人がカクタイブに使っているシートの一角に座る事になったのだが何やらにこやかに話し掛けてくれるご婦人との会話は全然通じず、同乗の二人の紳士は、私と眼が合うのをなんとなく避ける様子であまり面白い席では無かったのだった。

その代わり機がナンガパルバットの付近に達すると、福島県隊のガイドが機内放送のマイクを持ち、日本語で付近の山々の案内をしたりコクピットに隊の人達を順番に入れて写真撮影をさせてしまったり、なかなかの顔利きだったので、私も首尾良く、機上からナンガパルバットの撮影に成功したりして変化に富んだフライトだった。

そんなこんなで、朝の 9 時には、もうギルギットの 1.5 流クラスのホテルについた。1.5 流ともなると、もちろんバスタブは無くシャワーからお湯が出る事も無いがそれでもテレビのチャンネルは 4 つほどもあり、アメリカの西部劇をやっていたりしてなかなか大した物だった。

あ、そうそう、こちらも携帯電話の普及は大したもの、私のガイドのシャー（本名はムザファロだがどうも憶えられないので、ニックネームを聞くと、シャーだと云うのでこれで失礼する事にした）の携帯もかなりの山の中でも通じていた。これは 6 年の間で大変な変わりようだった。

この日は移動の予定はないので、バザールを見物したり（日本でもショッピングなんて大嫌いだ）、郊外の岩山の垂直の岩壁に彫られたブッダ（仏陀かな）の像の見物をしたりして時間をつぶした。

夕方ホテルに戻るとキャラバンの荷を積んだジープでコックのバルマーンとドライバーのカワノが到着しており、ポツポツ海老原登山隊が集まりだした。

6 月 3 日

ナンガパルバットの東南の麓のタルシンの村までは、ジープで 7 時間半ほどかかった。カラコルムハイウェイはこの 6 年の間に一段と傷んでしまっていて穴ボコだらけと云えばむしろ誉めていると云ってのも良い位で、穴ボコと穴ボコの間にアスファルトがくっついていると云った按配だ。今、だいたいの補修工事をやっているのだが何せ距離がペラペラに長く大変な工事量だ。全体に中国の会社がリーダーシップをとり、パキスタンの技術者、労働者が現場を進めると云った組合せのようだった。

私も工事業者だから仕事のやり方はよく解る。多少の問題はあるが測量とか目標とか其れなりに行っており、重機もコマツ等のパワーショベルも要所に配置稼働しておりまあまあ段取りだった。が、それにしても文字通りのハイウェイの姿が再現する事はほとんど絶望と云った感じだ。

途中の町で果物を仕入れたりランチをとったりしながら午後 3 時半頃、大体標高 3000m 位のタルシンの村についた。

下のインダス河沿いのあたりでは T シャツの上うすいジャンパーで充分だったのだけど、ここまで上がる気温はぐんと下がり、夕食時にはダウンを着込むほどだった。

今までのヒマラヤ行では標高 3000m 付近ではまだまだ暑さ対策に気を使っていたのだが今回はずいぶん分岐が違う。

シャーの話では、今年は山の残雪もずいぶん多く気温も低いと云う事だ。おまけにこの村のすぐ上までにチョンラ氷河の末端がおりていてその白い雪の斜面がすぐ上に見えている地形では一段と寒いのだろう。

私をチェックしに来た村のポリスマンはしっかりと厚いフリースを着込んでいた。

そんなこんなで、当初は村のホテルの庭でテント泊まりの予定だったのだが、部屋にはいる事となった。おかげでトイレその他、人目を気にしないで過ごせたのは有り難かった。

山の中に入ってしまえばどうって事はないが、村の中では何をすることもワルガキどもがうるさく、うっとおしいので、出来れば建物内で過ごしたかったのだった。

食事は今夜から、隊のコックのバルマーンの料理となった。

カレー味のチャーハンとかチャパティ、スープも鶏肉と野菜のミックスも、充分満足な物だった。

最近の 3 回のトレッキングでの隊のコックによる食事は、いつも十分に満足なもので生水による失敗さえしなければ、食事によるストレスは全くない。

6 月 4 日

きちんと予定通りの 6 時半に朝食となり、7 時出発は、初日は無理だと思っていたが少し遅れなだけで、準備が出来た。

ポリスマン、村人、ワルガキ達の見送りを受けて、重荷に足をしなせさせたロバとポーター達と共にいよいよ出発した。

村の中のダラダラ登りは何とか格好をつけて歩けたが、村はずれから始まるチョンラ氷河のモレーンに這い上がる岩道になると突然に急登となり、ロウギヤに落としてやっと這い上がるありさまとなった。

この辺りの山は根本的に尖がっているのでそのギリギリ根元まで食い込んでいる村から出るといきなり理不尽なほど急に登りだす事が多く、いつもエーっと思うのだ。ディランの登り口もそうだったし、ウルタルのベースへの登り口もそうだ。

ここはそれよりは少し人間的だが、身体を脅かすには充分だった。大体 100m ほど登ってモレーンの上になるとそこが峠で、道はそれから氷河の底に下り、更に反対側のモレーンを登り下りしてスタートしたタルシン村とあまり高さの違わないルパル村へと続いている。適当な巻き道があるのだろうと期待していたのだが、そんな急げは来るんじゃないって云う訳だ。

この道は根本的にルパル村とタルシン村とそれより下方への働き場への通勤通学路なので 8 年生以上の生徒はタルシンへ通って行く。スカーフをきれいにまとった女性徒も学校のテキスト何冊か小鞆に手に持ちスイスイと登って来て学校にむかって下ってゆく。時々「外国のお爺さん大丈夫？」っていった横目が通って行った。

2 時間少々かけてルパル村に入り、メイン通り沿いの店でティタイムを過ごしたりして元気を取り戻し、どンドン奥へ進むと道は細くなり、畑の中の畦道と変り、ついには農家の庭の中を通り抜けるようになってしまい、何かバツのわるい感じで歩をすすめた。

村道はその上でルパル川において橋を渡った所で終わり、それからは右岸沿いに左から下りてくる尾根や谷を登りこえながらすすむ踏み跡を辿るが、早くも雪がでてきてロバの足も結構もぐったりしている。（帰路にはこのあたりでロバが何回転がり落ちたりした）

このへんの急登では何回か頭がクラクラして不安な感じだった。まだ 3200~3000m 位の高



ナンガ・パルバット ルパル壁正面 ヘルリッヒコッファー BC (3650m より)

度なのでその影響と云うのも変なのだがプラス年齢のせいと云う事にして用心深くよりスローなペースで登った。

天気はあまり上等でなく、対岸に見える苦のルバル壁はその根元がうかがえるだけだし、時々雨粒がおちてきたりした。

谷が広くなった辺りの草原でランチとしてチーズとかクラッカーとかチャイがうまく、コックのバルマンが水の管理をしっかりやってくれているので胃腸は快調だ。

それでも悪天では落ち着かず、ゆっくりと出来なかった。

3時半、今日の泊り場のヘンリヒ・ヒコフアー隊のBC地に着いた。

ここは広い草原で牛が放し飼いにされて居りそれを管理する為の小さな小屋も建っている所で安心出来る場所だった。

ディナータイムの頃から本格的な雨が降り出した。

6月5日

夜中に雨の音がしなくなったので、止んだものと期待してテントをあけると、なんと雪に変わっていたので音がしなくなっていたのだった。大体5cmほど積もっている。

朝食には雪を踏み固めながらキッチンテントに行き、バルマンの料理を味わいながら取り合えず今日の行動は中止する事と決め、皆とノンビリとどべった。

ポーター達の雨具・雪用の履物は基本的には無いので降雪の中を行動しないのが原則なのだ。これは私のように道具を準備してやれない貧乏隊では致し方無い事なので、議論の余地は無い。がそれにして今までの地でこんな低い所で行動を止める程の悪天にぶつかったのは初めてだ。まるで日本の山にいるような湿っぽさではないか。

午前中は降ったり止んだり、雨になったり雪になったりしていたが2時頃のほんの15分位の間、雲に切れ目が出てルバル壁と頂上が垣間見えた。

シャーに知らされてテントから急に這い出しとにかくシャッパをきり続けたが初めて見るルバル壁に興奮して胸が高鳴った。

私の高さから頂上までの高度差は4500mほど有るはずなのだが、ちょっと見た感じではちょうど谷川岳の一の倉の岩壁位にきり感じない。

ヒマラヤにくるといつも距離感も高度差も三分の一ぐらいに感じてしまうのだ。壁の下の方の雪の斜面くらいはちょっと悪戯してみたいなどとルバル壁のモレーン登りでヨタヨタした爺さんがそんな事を考えるほど雲の間に間に見えるルバル壁は美しかった。

15分もすると雲の流れが変り視界は閉ざされてしまった。

4時頃になるとまたテントに音をたてて雨が降りてきた。

6月6日

夜中に一度も目覚める事も無く、そして明け方には楽しげな夢をみてご機嫌な朝を迎えテントから出ようとするとうちの入り口のシートは昨日よりもずしりとしていた。

恐る恐る外をうかがうと何と昨日よりも深く、そう15cmほど雪が積もっていた。

小キジだけは仕方無く出かけたがタングスタ足の運びをするのと靴の中に雪が入ってしまう。どうやら今日もテントの中でごろごろして1日を過ぎなければならぬらしい。休みはそう嫌いな方では無いが動く間に休むから少し嬉しいので、狭いテントの中での連休と云うのは半屋に入れられてしまったみたいな物で時間を過すのはかなり難しい。

日記を書いたり本を読んだり。でも空が暗いと近頃老人性の眼となっている私にとってはこれが中々難しくてテントについて雪をこぶして叩き落として明かりを確保してその上で、本とか日記帳を一番良い角度にキープして読んだり書いたりするのですぐに疲れてしまう。そこで今度はジムでやるストレッチをやって身体の凝りをとり、ついでに腹筋運動をする。3度の食事の間はこんな事を繰り返しながら時間の過ぎるのをまつのだ。

ハーモニカでも吹ければ良いのだが私は口笛もロクにならないので始末が悪い。

とにかく雪がやみ明日の朝日のぼるのを待つ。

6月7日

オホー、3日続きで何か降って朝となった。今日は雨だ。明日は何を降らすんだ？

コックのバルマンが今年はとにかく寒い。と保証する。温暖化も今年に限ってはストップしている。私達の周りでは。

朝食後、がんばって下着の上のスポーツシャツを毛の物に替えた。どんどん寒くなってくるのでそれに対処したほうがよさそうだから、昼間にはパンツも山用の物に替えることにする。でもアンダーシャツだけは行動中に暑いと辛いのでスポーツ用のTシャツのままにする。どうやらガイドのシャーはカゼをひいたらしく頭が痛いと言っているのでまさか彼が高度障害の筈が無いのでカゼ薬をやった。多分効いたらしくその後はなにも云わなくなった。

10時頃になっても気温は少しも上がらず、これで3日連続のいやもっとも長い低温だ。

うとうとしている時に突然、頭上で轟音を聞いた。雷か雪崩かわからないが取り合えず急いでテントの外に出て突風にそなえたが何事も起らなかったの、どうやら雷だったらしい。これがルバル壁からの雪崩だったらかなりの突風が襲ってくる事だってあるので、飛ばされるテントからは出ている方が無時と判断したのだった。

おどかさされたが、どうやらあの雷が雨の終わりの合図だったのか、ランチタイムの頃には、何と無く空も明るくなってきた。

とにかく2日半振りに雪とか雨が止んだのでだれもが少しまとまった歩きをしたくて仕方が無くなっており、取り合えず上部キャンプに予定しているシャイギリ(メスナーベ-ス)まで登ろうと云う事になりそれこそ飯をかみかみテントに帰り、仕度を急いだ。

こんな時には大体ポーターあたりから文句が出るものなのだが、皆、生き生きと動き廻り、凄く早く出発の準備ができ、ロバの尻を威勢良くひっぱたいて歩きだしたものだ。

シャイギリまでのルートは景色にほとんど変化が無くルバル壁が少しずつ右後方に移る訳なのだが、あまり見通しがきく訳でもなく、同じ所をハアハアゼイゼイもがいているようで何ともしよう無いが2時間半ほど頑張ると丸っこい丘を乗り越えた上がキャンプ地だった。

そこからはある程度、谷の奥がうかがえたのだが、どうやら上部は雪がベタリ着いてお

り、この先は、キャンプを進める事は難かしそうな様子だ。となればこれより上部は根本的に、小人数の日帰りの行動が限界となっていまい、マゼノ峠に登るのは決定的に無理と云う事になる。

本当の事は、明日以後天気が上がり、廻りの景色が良く見えての話したが、そんな気配は濃厚だった。

それにしても久方振りに身体を動かしたので、それも3時間足らずの軽労働だったので身体のコンディションは上々となった。

6月8日

昨夜は、シャー達のテントでずいぶん遅くまでおしゃべりが続いたり、枕にした袋がすべったり、やたらと寒かったりで、寝つきの悪い夜だったが、ふと眼が覚め、まだ夜中かと思っただ、薄明かりを感じてあわてて飛び起きた。

何せここ数日、朝の光などはすっかりご無沙汰だったのでやや度を失ってしまったのだ。とにかくまわりの景色を見渡すと、見える見える、今まで雲の間から覗くように見えていたナンガルバルツの本峰はもとよりルバル谷をはさんで対岸の6000m峰のルバル峰、谷の奥のどんずまりのマゼノ峠方面そして谷の入り口のルバル村方面の地平線からは太陽がのぼり始めている。

今日はマゼノ峠へ向かい出来るだけ高く登ろうと予定している日なのだが、その為にこのシャッパ-チャンスをおろそかにする気はなく、テントの上部の丘に登り、雪の上で足踏みしながら段々と朝日に輝きを増すルバル壁を中心に、とにかくこの感動的な景色をカメラにおさめるべくシャッパ-を切り続けた。

昨日3時間ほどキャンプの位置を上げたのでルバル壁の正面からやや左からのアングルとなっていたのが残念で結果的にはルバル壁正面の快晴時の写真は、とうとう逃してしまっていたのだった。

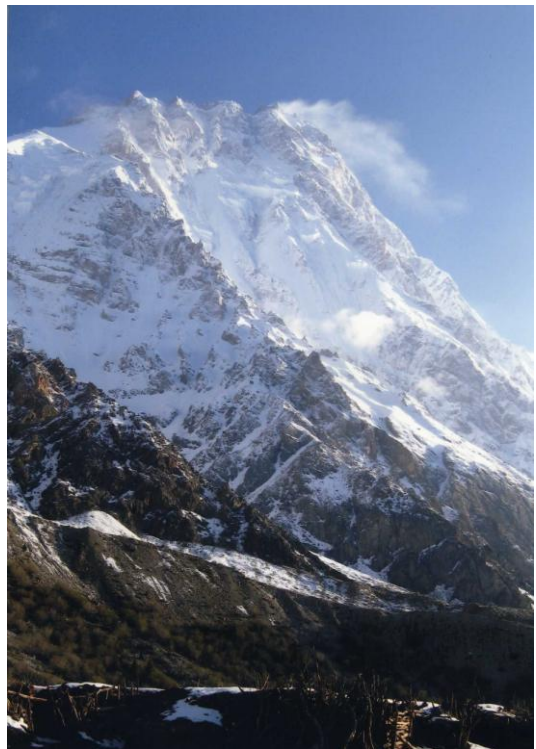
気が付けば朝食前のティータイムになっていたらしく、コックのバルマンが大きめのカップに紅茶をいれ、冷めないようにごつい手で包み込んで運んできてくれた。

紅茶も温かかったが、こんな時の彼等の心根がもっとも温かいのだった。

今回このキャンプより上に登るのは、私とガイドのシャー、そしてサブガイドのような位置にいるジャム、シーの3人で、通常の頂上アタックと比べればかなりお気軽の感で出発した。

谷の中央はいよいよ氷河となり、私達はその右側の岩壁の裾をぬうように高度を上げていった。ルートとしては特に難しい所も危険なところもなく、たんたんと距離を稼げるが、ナンガルバルツの頂上からは、むしろ遠ざかる方向に動いているので段々見えにくい位置に入ってしまった。大体予想はしていたのだが、思っていた以上に面白みが無くなってきた。

その分対岸のルバル峰は随分よく見えているが、何と言っても8000m峰に対する6000m峰ではどうしても見劣りするの否めない。じゃあ登って見ろ。と言われれば困ってしまう



ルバル壁 少し左側 (シャイギリ 3655m)より

のだが、やはり、胸は轟かない。

そんなこんなで 3 時間ほど登り、氷河湖を眼の下にしたあたりで今回のこちら側の行動はこれまでと云う事にした。ザイルを使う事も無くひたすら 2 本足での行動に終わってしまったのはかなり食い足りない感じはあるが、はじめからそう云うコースではあったのだ。高度としては 4000m 程度のものであったろうとおもった。

体調としては特に苦しむといった事はなかったが、時々クラクラする事があり、そしてよくつまずくの気がいらぬ。易しい所だからよそみが多いからと言えば格好が良いのだが、やはりそれなりに衰えているのは間違いない。残念だけど。

帰途につき、キャンプ地のほんのすぐ近くになって私の家で飼っている犬のラブラドールのとそっくりな足跡があった。きけばロバとか牛をねらっているウルフのものだと云う事だったのがこんな厳しい条件の地で食料を得ようとする野生に訳も無く感動を覚えた。

日暮れ時になるとまたまた雲がでてきて、また星の見えない夜となった。

6 月 9 日

上天気とは云えない朝がやって来た。

未練が残るような気もするし、こんな雨と雪ばかりの地はもうたくさんだ、と云う気もするが、機械的に荷作りがすんで下に向かって歩みはじめてしまった。

やはり、下りとなると足が早く、少しでも雲が切れると、こんなに急に山を下りなくても良いんじゃないか、もっとゆっくりしなさいよ、遠い国からやって来たんじゃないか。と放浪爺さんの気まぐれが頭を持ち上げるが、このまま住み着く訳にもいかず、振り返りながらも道は、はかどってしまい、2 時間程でヘンリヒ・ヒコフファー BC に着いてしまった。あまり早く着いてしまったので、やはり誰でも考える通りの話が出てきた。

ランチの時にシャーから海老原さんさえ良ければこのまま足を伸ばして今日の中にリバル村まで下りたいが、と、相談された。

実の所、私も歩きながら考えてもいたんだけど、せつかくルバル壁の正面に在るのに向いて、見晴らしが効かないので、何と無くうなずいてしまった。ポーター達にしてみればルバル村はもう彼等の家と同じようなものなのでよけいに屋根の下で寝たいのだろう。

それでも村までの道中は、ばかにしたものでは無く、特に右岸から谷が合流して来る雪の斜面の高巻きの所、登りの時、私はクラクラとめまいがして困った所なのだが、ロバが転げ落ちたりして、かなり緊迫したものだった。

これでヘンリヒ・ヒコフファー BC をでて 4 時間ほどで村はずれの橋にまで下り着いた。ここで私は急にスタミナ切れとなり、村への登り道でかたつむりのようなスピードになってしまった。そして、それから宿とした、村の集会場のような建物に着くまでの小 1 時間、シャーがサブザックを背負ってくれたのに、やたらとながく感じられた。

考えてみれば、橋のそばで一服すればよかった物を、村里のそばに下りたのでどうも、うわずってしまったのがいけなかったのだと思う。

もうなだれ込む、なんて元気の良い言葉を使える歳ではなかったんだ。まあとにかく、その夜は建物の庭にテントを張り、久しぶりのトレ付きの一夜を過した。快適かってか？そのトレがなー。

6 月 10 日

ジープ道の有るタリシンはもう隣り村だ。今日はもう村人や家畜たちの通勤、通学路をたどれば良いのだ。簡単な物だ。往く時に子供達に案じられた、2 本のモレーンを除けば、だ。時間はたった 2 時間位なのだが、予想通り 100m もの登り下りを 2 回繰り返すのは、少しもうれしくなかった。

すれ違うロバとも牛とも人間とも笑顔であいさつとは行かずバテちゃったマラソンランナーのように見栄にも外聞にもかまうのは諦めてしまっていた。

でも最後の下りを残す峠に立つと、またまた山へ戻りたくなったりするのは我ながら困った病気のジイさんだと思う。

タルシンにつけば私と同じ道を通った生徒達の学校はもう授業が始まっており、校門は偉そうに閉まっていた。田舎の学校の割には意外とセキュリティがしっかりっぽくしているみたいだった。ちょっと覗いて見たかったんだけど.....

ホテルに着いてからは前から考えていた通りに早速我儘をいって洗面器に 2 杯ほどのお湯を作ってもらい何とか明日の出発までに乾いてくれるのを願いながら北面に回った時に使う下着とかソックスを洗いまくりそしてヒゲも剃った。ヒゲなんて北面を登っていれば、またのびてしまうのは当たり前だけど、私はいかにも山男じみた態度はあまり好きでは無く。出来るだけごく普通の旅人のスタイルでいたいのだ。

ついでに身体も洗ったがこれにはお湯が足りなくて、結局は水で拭いたような事になり終わるまでにすっかり身体が冷えてしまい風邪をひいてしまったらしく後で頭が痛くなってしまった。山を下りてから風邪をひくとは間の抜けた話となった。

そんなこんなで少し遅くなってしまったランチを済ませた 2 時頃、パキスタン陸軍のジープがパトロールで登ってきた。村の駐在さんも緊張気味に報告などしている。当然、私のところにも来てパスポートのチェックやら行動のチェック。そして年齢は、エッ 68 歳？ウソだろ？ときた。そうパキスタンの同年齢くらいだともう外仕事にもほとんど出てこないのが普通だそうだから、外国の山登りに来るなんて、もう呆れたものなのだ。

年齢だけが、威張れるネタと云うのも情けない話なのだが、私は遠慮無くふんぞり返らせてもらう事とした。彼等は充分好奇心を満たしてハイタッチをして帰って行った。

それにしても、今までこんな奥地まで軍隊のパトロールがきているのは初めて見た。やはりかなり近くまで勢力をひろげているタリバーンにたいする緊張なのだろう。

これはその後、何度か往復したインダス河沿いのカラコルムハイウェイでの各チェックポイントでの武装の厳重さにひしひしと感じられた。

所で明日からはジープでナンダコットの北面に廻り込み再び 4000m 位まで登り直す計画なのだが、あちらには(ホテル)と言ったが、とにかく宿泊設備があるとの事なので、今日は私とシャーだけでサブザック 1 個を背負って 5 日間を過す事になる。テント類はもちろ

んシユラフ、ピッケル、高所用の登山靴、等は我々が乗るジープが我々を北側に送った後にギルギットに荷を回送するので、今日の内に武装解除をする事になる。その為には無理な洗濯をして風邪をひいたりしたのだ。

明日は行動時間がながくなるし、ちゃんと宿泊地まで着かないと気温の低い今年なのでかなりやばいのでしっかりと早朝に出発しなければならぬ。

6 月 11 日

ワタのジープに乗り込み大体標高 3000m 位のタルシンの村を 7 時頃に慌しく出発し、恐ろしいほどの急坂をインダス河の本流までひたすら下り、そう、標高差 1000m 程も下りるのであるか、カラコルムハイウェイにでる頃には気温は上がって T シャツ姿となる。朝はダウンを着ていたのだが。

インダス河沿いにさらに下りライコット橋のあるライコット村に到着したところでワタのジープは我々の荷物とコックのバルマンを乗せてギルギットへ引き返す事になる。

食事にはあまり文句を云わない私ではあるが、限られた食材での毎日の献立には随分苦労があったことだろう。とにかく気に入らない食べ物は無かったし、胃腸が不調になった事もなかった。張り合いがなくて申し訳ないが、だから彼はきっと名コックなのだろう。ダルマが突ったような愛嬌のあるバルマン達とここでホコリが舞い上がるハグをして別れた。

一服後、今度はライコット村のジープに乗り込み、またまた思いっきり急な斜面を這い上がる。今度は牛のようにゆっくりしたスピードでスイッチバックを繰り返しながら高さを稼ぐ。オフロードドライブさながらのテクニックでまったく遅いもんだ。

崖崩れの箇所があるたびに、その上に置いてあるジープに乗り換え、乗り換え、3 台目でジープ道の終点に着いた。標高は大体 3200~300m くらいだろうと思われる。大体 5 時間位のドライブだった。ジープで 1000m 下りて 1200~300m 登り返しこれから更に徒歩で 600~700m 登るわけだ。オレってそんなにタフだっけ？

とにかく、少し遅いランチをすませて出発したがやっぱり身体はデレデレで、さっぱりテンションが上がらず一歩一歩身体を引き上げるのがなかなかの苦労だ。と云うのもこの登りは完全な道であり居眠りしていても脳へ落ちたりしっこ無い樹林帯の中の巾広いものであり、聞くと、一度はジープを通せたこともあった所だそうだ。

地元の人達は残念なのだろうがこの程度の不便さはあったほうがこの地の自然を維持し出来るだけ手付かずの状態を保つ為には良いんじゃないかと思う。

と、格好つけるのとは別に正直に云えば、眼をつぶって、バツと明ければ上の小屋のストロブの前と云う訳にはいかないかな、等と願ってしまうのはいつもの通りだ。

私ばかりで無く、シャーだって小休止の時にそうとキジ玉を持って木陰に消えたりしてシャイなフンザ人には有り得ない事だが、彼の身体だってストライキをおこしているのだ。小雨が降るさえない空模様ではあるが遠望が効かないほど悪くも無いので登るにつれて左上に大きな氷河の末端壁が少しずつ姿を表し、ポーとした頭の中で改めて、あっ俺はか



タルシン村〜ルバル村のモレーンの上(峠)にて



ルバル 氷河 3900m 付近の氷河湖

ってヘルマンブールがはるばるインドからキャラバンを組んでこの地に達してナンガルバットを初登頂したルートそのものを歩いているんだ。ボケてられないんだ。と気がついて少しばかりシャンとして、3時間ばかりかけて尾根の上の広場になっているフェルメドのキャンプ地に登り着いた。

そこは正面にナンガルバットの北面の大氷壁がいきなり立ちふさがり、左側からは自分達が立っている尾根と平行してライコット氷河がくいこんでいて、尾根の上部の樹林帯の緑とその奥の氷壁の白さと空の青さがいっぺんにかぶさって来るようなところだった。ダレタ道だから気合が入らないのカツルイのと文句タラタラだったのがピンタを食らったほどの劇的な変化が最後の登りにはあった。

大自然の景色にはすっかり恐れ入って何の文句もないが、キャンプ地の開発にはかなりの事、文句が沸いてきたのは、到着して間もなくだった。

何せ宿泊用の建物(バンガローと云うかコテージと云うか)せまい所に数多く建て過ぎるのでその間の樹も芝の緑も無くなっちゃうのでごちゃごちゃするし季節が早いから、ろくにゲストもいないのに相変わらず同じパターンでどンドン樹を伐って小屋を作りならべているのだ。今はもう 5~60 棟も有るのだ。作るんだったらもっと離して下水処理をちゃんとやって。下の村を持ち上げるような事をやっちゃ駄目なんだ。ゲストに便利でない事を残しても良いんだから。

どうせ窓なんて少し強い風が吹けばいっぺんにあいちやうんだから(実際その晩に私は窓を押さえつけて過したのだった)。

だからそうしろ。

6月13日

前日は初めて予定した休日としたので日にちが一日ずれたが別に呆けた訳では無い。実の所、最初の予定では今日は頑張ってプールのベースキャンプ地まで足を延ばしてメドウスの 2 時間ほど上にあるピアウまで帰り着く予定をたてていたのだが、ピアウのすぐ上から雪がベッタリで冬靴やピッケル等をギルギットへおくってしまった為に手も足も出なくなってしまうのだった。これはフェルメドまで登って来てわかったのだから仕方がなかったのだ。

ピアウまではたかだか 2 時間ほど同じ尾根を登っただけなのでそれほど眺めに vari は無いが北面の氷壁が一段と頭上にせまってきた。日本の山だったら 2 時間登れば壁にはついてしまうだろうにやはりヒマラヤはデカイ。

ピアウの番人はゲストもいないので昼寝の真最中でシャーが窓をドンドン叩いても容易に起きなかった。番人は外に出てくれればやや細めだが 2m の大男で呆れるほどにデカイ。それが、シャーに叱られて身を縮める姿は何とも愛らしく可笑しい。

別の時、氷河の向うに立つ美しい 6000m 峰を指して、1 日で登れるから登って下さいよ。と言ったが、おまえならばな。

ま、かたい所、登り下りで 4 日間といった所かな。それでも下から登って来ていきなりそのまま登れば日本人にはかなり危ない。なんせ 4000m 位の高さで毎日を通しての彼等の身体の状態にはずいぶん日にちをかせなければ駄目だろうな。

それとはにかく、この地に来るとヘルマンブールの隊の登頂ルートはずいぶん解り易く、逆に言えば、北面からはこれ以外は危なくて登れまいと思われる雪壁、氷壁ばかりなのだ。ま、今は全部で 8 本もの登頂ルートが開拓されているとのことだから絶対とは言えないが……。

6月15日

前日は時間を持て余してしまったが、写真だけはあきるほどシッパをきったのでどれか一つ位は何とかなるものもあるだろう。

だからと言って早く都会に下りてしまうとホテル代がかかって仕方が無いので 14 日はダラダラと山の中で過した訳だ。

だから 15 日は夜が明けるずっと前から外を覗んでいたおかげで凄まじいほどの朝焼けのナンガルバットの北面をしっかりとカメラに収める事が出来た。

シャーも今日はギルギットまで下りる予定なので予定よりもずいぶん早く出発の準備を終えて私を待たせたものだ。これでは 2 人のパターンが逆転だ。もうひとつ逆転したものがあつた。下り始めて間もなく彼はもの見事にすころんで、道から飛び出すような勢いだった。今まではクラクラしたり転がるのは全部、私の受け持ちだったのだが今日だけはちがった。私はポケットに手を突っ込んで鳴りもしない口笛をふいてみたもんだ。そんなこんなでも 2 時間ほどでアッサリとジープ道までおどしてしまい、今回の山行は終わった。

ライコット橋のあるカラコルムハイウェイまでは例の通りジープを 3 回乗り換えながら下り、自動小銃とピストルを得意そうに見せびらかすポリスに見送られて今度は平地用のジープに乗ってゆられまくりながら夕刻にギルギットのホテルにおさまった。

そして、自分でも臭うほどの、いろいろの洗濯に忙しい時間を過す。明日は飛行機が飛ばば早立ちだ。

でもシャーのチケットは軍人の割り込みであやしくなって来たとか大騒ぎしているし、その前に今外はかなりの雨なので、きっと飛ばないよ。チケットなんて売り付けちゃえ。

6月16日から18日の出国まで

やっぱり飛行機は飛ばなかった。チケットの取りっことも空しく、私達も軍人も同じスケジュールになった福島隊もこれから 2 日間かけてインダス河沿いのカラコルムハイウェイのロードレースにいや応なしに参加させられたのだ。

私達のはかなり程度の良いランドクルーザーで、福島隊はバス、多分シャーのチケットをゲットしたと思われるアーミーの 2 人組みは軽快なジープ。それらを含む多分 20 台位の臨時特急便がインダス河の上、大体 200m 位の高さに切り込まれた急カーブ連続のガタガタ道を抜くつ抜かれつ飛ばす。私達のドライバーのワリイは顔は思いっきりの優男で女に仕立てても上の部に入るほどの草食系の超イケメンなのだがこのケイによくあるそう、

極め付きのスピード狂だったのだ。

2 日間とも箱根駅伝で言えば、区間賞は確実に得たことは間違い無いが、乗っている私は生きている壊れ物なので、昼になっても奴の顔つきをうかがわないうっかりした物を食ったら紳士にあるまじき醜態をさらけ出してしまふ危険性を感じたものだった。

そんな訳でギルギットの出発は決して早いほうでは無かったのだが前述の 2 台を含め多分全部の車を追い抜いてしまい 1 日目の宿泊地のベシャムのホテルに着いてしまった。

夕方になるとあちこちからアラーの神へのお祈りの声が聞こえるが、私も心から今日の無事を感謝し明日の幸運を祈ったものだった。

2 日目は 2 時間程でインダス河からはずれて、まあ落ちても救急車程度の崖道になると我がワリイ君もスリルを楽しめなくなってしまったらしく、わりと普通の運転手になってしまってランチタイムには車を拭いたりしていた。イスラマバードまでついに変なスイッチは入らずの後は何事もなく出国できたのは、アラーの神のおかげに違いない。

そして最終日、ナジール事務所のマネージャーがホテルにご挨拶に来ると言うことなのでオウ我輩も大物になったもんだと悦に入っていたらギルギットからの便が陸路になったが為の追加料金をしっかりと集金されてしまった。

契約の通りなので払うのが当たり前なのだが、前回は請求もされなかったもので、そのまま踏み倒してしまったのだが今回は気が付かれてしまったのだった。

海老原道夫



ナンガ・パルバット(8125m)北面(ピアウのキャンプ地から約4000m)



